

精神分析の〈文法〉

— ヴィトゲンシュタインのフロイト批判から —

簿 井 明

1. はじめに—問題の設定—

S.フロイトによって創始された「精神分析」がもはや精神医学の一領域に止まらず、一個の独立した〈知識体系〉として他の学問諸領域に多大な影響を与え続けてきたことは衆目が認める否定しがたい事実である。フロイトが残した著作それ自体が膨大であるだけでなく、そこから広がる「フロイトの精神分析」という主題は、それ以上に多様かつ広範なものであったし、またあり続けている。それは精神分析内外で行われている批判・修正・精緻化でもあり、精神分析的概念の他領域への適用でもあり、精神分析全体を社会思想的意味連関で論じることでもあり、精神分析の理論形成過程をフロイト自身のライフ・ヒストリーから解明しようという「精神分析の精神分析」でもある。しかし、そうした「フロイトの精神分析」についての言説の増大にもかかわらず、「精神分析とは何か」という問いに対する明瞭な解答が提出されているとは決して言えない。「フロイトの精神分析」を論じようとする者には、一種独特の「座りの悪さ」の感じが付きまとう。批判するにしても擁護するにしても、「精神分析とは何々だ」と断言してしまうことへの「躊躇」であると言ってもいいだろう。

その不安定さの根底にあるものを探っていくと、そこには、精神分析という〈知〉をどう位置付ければいいのか、という「戸惑い」が潜んでいるように思われる。そして、その「戸惑い」には二つの両極的なタイプが想定し得る。その一方は、「経験科学的な立場」と呼んでいいだろう。その立場からなされる批判は、〈理論〉としての精神分析が「客観的観察可能性」「実証性」等の要件を満たしていない、というものである。しかし、その次元では正当な「経験科学的」批判も、〈治療技法〉としての精神分析が持つヒステリー及び神経症の治療効果の問題には無力である。極端な場合には、その治療効果に対する疑

義にまで至ることさえある。これは過剰な合理化である。

もう一方は、〈理論〉としての精神分析が或る“真実”を捉えていること、〈治療技法〉としての精神分析が或る“効果”を持っていること、それを認める、言わば「非経験科学的な立場」から出発している。しかし、フロイトを読み進めていく過程で、精神分析の治療効果とそれについての精神分析的説明とが必ずしも一致していないのではないか、という疑問が浮かんでくる。あるいは、それは精神分析が実際にしていることとそれについての自己理解との間に存在し得るズレの問題が、「フロイトの精神分析」の持つ“理論的包括性”ゆえに糊塗されてしまっているのではないか、という危惧感でもある。

これらのどちらか一方を取る必要はないし、一挙に解決する必要もない。錯綜する問題群を整理する一つの方途は、まず「フロイト」の名の下に一括されてきた言説をいったん解体し、「精神分析」の幾つかのレベルを峻別することから始まる。例えば、J.ラプランシュとJ.-B.ボンタリスは『精神分析用語辞典』の「精神分析」の項で次のように述べている。

「フロイトが設立した学問で、彼にならい、我々はそこに三つの面を区別できる。

A) ある主体の言〔パロール〕、行為、想像的産物（夢、幻想、妄想）のもつ無意識の意味作用を明らかにすることを基本とする一つの探究方法。この方法は主として主体の自由連想にもとづくもので、それが解釈を可能にする。

〔……〕

B) 上の探究にもとづき、抵抗、転移、欲望をある枠組のうちで解釈する精神療法。この意味での精神分析と言う言葉は、精神分析治療と同義である。

〔……〕

C) 精神分析的探究方法と治療方法によって得られたものが体系化されている、心理学および精神病理学理論の総体。〔1973, p.367, 邦訳, p.269〕

ここで〈探究方法〉〈治療方法〉〈理論〉と言われている諸レベルは、勿論「フロイトの精神分析」の不可欠の構成要素であることは事実だが、各レベルで満たすべき要件の違いも看過されてはならない。精神分析に纏わる「誤解」や「全面否定」「盲信」の少なくない部分が、こうしたレベル間の区別を充ち行っていないところから生じているように見える。

こうした現状を打開する第三の道は、精神分析が一定の治療効果を持つこと

を前提としながら、そこで何が生じているのか、という問題を、精神分析自身の説明を最終的審級とせず⁽¹⁾に解明することである。それは問題の性格から言っ⁽²⁾てかなり複雑な作業になるだろう。その手始めのとして「フロイトの精神分析」という〈実践〉と〈言説〉がどのような組成をしているのか、〈臨床〉と〈理論〉との関係はどうなっているのか、という問題が設定し得る。その課題に対して筆者は、基本的に次の二点に立脚しながら、「フロイトの精神分析」が持つ〈言語—実践〉体系としての特質を明らかにしようと思う。

- ・「フロイトの精神分析」と一括されてきたものの中には、峻別すべき幾つかのレヴェルの言説が含まれていること。
- ・その中で「フロイトの精神分析」の中心は、あくまでヒステリー及び神経症の〈治療技法〉であること。

本稿で筆者は、哲学者L.ヴィトゲンシュタインの残したフロイトに関する断片的な言説を手掛かりにして、この問題に接近してみたい。確かに、彼のフロイト批判は一方では「凡庸な」誤解を含んではいるが、精神分析の〈言説〉に取り込まれてしまう危険性とは如何なるものかの暴露という形を取る彼の〈言語〉に対する考察は、問題析出のための触媒となるはずである。

2. 精神分析の〈理論〉的側面と〈修辞〉的側面

フロイトとヴィトゲンシュタイン。一見すると唐突な組み合わせである。あまり知られていない事実だが、ヴィトゲンシュタインは「フロイトの精神分析」にかなり注目をよせ、そしてそれだけ深くフロイトを批判している。ヴィトゲンシュタインの1919年頃の言葉として次のような言明が伝えられている。「それから何年かののち、わたしはたまたまフロイトのある書物を読んでびっくりした。そこには言うべきことをもっている人物がいたのである。」[p.206] (*) それ以降ヴィトゲンシュタインは自らを「フロイトの弟子」とか「フロイトの追従者」と称したという。だが、その意味は逆説的である。フロイトには学ばべき何ものかがあるがゆえに、徹底的に批判的に接しなくてはならない。そして、実際に彼が残したものは、「フロイトの精神分析」の言説が持つ〈魔術的〉性格の徹底暴露であった。彼の批判は、彼特有のアフォーリズム形式のために断片的であり、論点も統一されているとは言えないが、ここでは当面の課題に関わる限りで、彼の批判に則して展開してみよう。

哲学上の様々の難問が<言語>の使用法の混乱に起因していると主張するヴィトゲンシュタインは、それを「文法」の問題として総括している。例えば、<原因>という語には事実次のような幾つかの用法が存在する。

「12. <原因>ということばは非常に沢山の違ったしかたで用いられる。たとえば、

- (1) 『失業の原因は何か。』『何がこの表現の原因なのか。』
- (2) 『あなたが跳び上がった原因は何だったのか。』『あの騒音だ。』
- (3) 『あの車輪が廻っている原因は何だったのか。』諸君はメカニズムをたどる。[*]

＊原因(1) 実験と統計 (2) 理由 (3) メカニズム—T」 [pp.152-153]

この例で言えば<原因>という語の使用に応じて、<説明>するということがどのような要件に応えるかが決定される。人間の或る事象に関して、その<原因>を「問う—答える」ということの内には多様な「言語ゲーム」⁽³⁾が展開されうるのである。<原因>と言うことで<理由>の説明が求められたり、個人の内部／外部、生理／心理／社会関係のいずれかのレベルでの<動機><動因>の説明が求められたり、あるいはそれを引き起こした<メカニズム>の説明が求められたりするわけである。もちろん日常生活においてこうした区別をしなかったとしても殆ど支障はないが、厳密さが要求される学問的説明においてこれを怠ると、様々な混乱を招くことになる。

そうした「言語ゲーム」の違いを認めた上で、ヴィトゲンシュタインは<説明>の持つ<妥当性>というものとそれが受け取る側に与える心理的效果とが奇妙な形で融合してしまう例として「フロイトの精神分析」の<説明>を挙げている。

「39. フロイトの『機知と無意識』を参照せよ。フロイトはしゃれについて書いている。諸君はフロイトの与えている説明を因果説明と呼んでよい。『もしそれが因果説明でないとしたら、その正しいことをどのようにして知るのか。』諸君は言う、『そう、その通り』と。フロイトはしゃれを變形し、しゃれの一端から別の一端へ連なる観念連鎖の表現とわれわれが認めるような別の形にしてしまう。正しい説明の全く新しい叙述である。経験に合致している説明なのではなくて、容認されてしまう説明なのである。[……]」 [pp.162-163—傍点は引用者]

この「容認されてしまう説明」という事態の中に含まれている対人的要因をより顕在化させ、抽出すれば、それは「説得—納得」という影響関係である。それが一層積極的に作用するのは〈分析治療〉過程であるが、精神分析の言説は「説得—納得」という影響関係によって生じた結果をそれとは無関係に導出される「仮説—発見」過程の問題として総括してしまうのだ、とヴィトゲンシュタインは言う。

「諸君が精神分析に導かれて、本当は自分はかくかくとかがえていたとか、本当に自分の動機はかくかくであったとか言うとするれば、それは発見の問題ではなく、説得の問題なのである。違ったやりかたをすれば諸君は何か違ったことに確信を抱くことがありえただろう。もちろん、精神分析が諸君のどもりを癒すのであれば、それは癒すのであって、そのことは一つの成果である。ひとは精神分析のある成果を、精神分析医によって諸君の説得させられた事柄とは関係なく、フロイトの発見したことだと考えてしまう。」〔pp.180-181——傍点は引用者〕

ここには精神分析の〈治療技法〉を「説得」の問題としてしまうヴィトゲンシュタインの「凡庸な」誤解が含まれているが、一方で対人的要因が含まれる「科学」において「発見」と言われる事態が如何に微妙な性格のものかについての鋭い洞察がある。精神分析の中心をヒステリーおよび神経症の〈治療技法〉に置くとすれば、“症状”を抱えた被分析者を治癒させる過程の中に（それが直接には「説得」や「暗示」ではないとしても）何等かの〈変容〉が含まれていることは当然である。だが、ここでヴィトゲンシュタインが「フロイトの精神分析」に対して批判している一番の眼目はこの〈変容〉の問題ではない。精神分析の治療実践が被分析者に影響を与え、彼を〈変容〉させ、それゆえに治癒させているという事態を、それとは全く無関係に導出された「発見」の問題であるかのように総括し、精神分析の「科学的理論」としての《妥当性》の内に収奪してしまう、精神分析の言説の《魔術的》性格を暴露しようとしているのである。

この点を更に明確にするために、ヴィトゲンシュタインが言う「正しい説明」の三種類のタイプを引用しておこう。

「26. 諸君がどもりようになって精神分析をうけたと仮定せよ。(1) 諸君はどもりを直してくれる説明〔分析—R〕が正しいのだと言うかもしれない。

(2) どもりが直らなくても、その基準は分析をうけた人物が『この説明は正しい』〔*〕と言うか、あるいは自分に与えられた説明の正しいことに同意することであるかもしれない。(3) もう一つの基準は、説明を与えられた人物がそれを受け入れるか否かに関係なく〔**〕、ある種の経験規則〔***〕に従えば与えられた説明が正しい説明である、ということである。〔……〕

*くええ、その通り、それこそわたしが思っていたこと。>—R。あるいはまた、分析を受けた人物の同意するアナロジーが正しいのだ、と諸君は言うかもしれない。—T

**あるいはまた、正しいアナロジーとは受け入れられたアナロジーのことである、と諸君は言うかもしれない。通常与えられているようなアナロジーのことであると。—T

***そのような現象を説明する規則。—R〕〔p.177〕

これを今後「《妥当性》の三つのレベル」と呼び、筆者なりに次のように言い換えて使用することにしよう。(i) 精神分析の主張が納得できるとか、理論的に一貫しているとかの問題に関係なく、ヒステリーや神経症を治癒させることができるかという〈治療技法的妥当性〉のレベル、(ii) 妥当性判断の強力な拠り所である日常的経験に照らしてみても納得できるかという〈経験的妥当性〉のレベル、(iii) 一つの理論体系としての理論的一貫性と適応領域への説明能力があるかという〈理論的妥当性〉のレベル。

これら三つの《妥当性》を導入しながらフロイトが精神分析を構築していく過程を見てみると、事実関係としては(i)の〈治療技法的妥当性〉が先行していること、理論形成・改変の過程でもそれが中心をなしていることがすぐに確認できる。しかし同時に、フロイトは当初から「どうすればヒステリーや神経症を治癒させることができるか」という問題だけでなく、「どうすれば精神分析を〈学問的体系〉として構築することができるか」という問題にも専心して⁽⁴⁾いた。その意味で精神分析は(iii)の〈理論的妥当性〉に対してもかなりの比重を与えてきたわけである。そして、そうした、“科学者共同体”の中で支持を得るという当時としてはかなり困難な課題を達成するために、その外側にいる人々の支持を得る作業も怠りはしなかった。(ii)の〈経験的妥当性〉に関わる問題である。「フロイトの精神分析」と一括されているものの中には、相互に区別しうる三つの〈妥当性〉基準から発している言説が混在していることを確認して

おこう。

そこで再びヴィトゲンシュタインの批判に戻れば、まず「フロイトの精神分析」には(i)(ii)(iii)全ての水準で「容認されてしまう説明」および「説得」という要因が介入していることというのである。だが、各々の水準でその要因が果たす作用は少しずつ違う。(i)〈治療技法的妥当性〉においてはヴィトゲンシュタインの別の批判があるが〔次節で扱う〕、ここでは一先ずそれはあまり問題にならない（「もちろん、精神分析が諸君のどもりを癒すのであれば、それは癒すのであって、そのことは一つの成果である。）。問題は(ii)〈経験的妥当性〉と特に(iii)〈理論的妥当性〉において生じる。もし仮に精神分析が神経症やヒステリーを治癒する一つの技法に止まっていたとしたら、ヴィトゲンシュタインもこれほど徹底した批判はしなかったであろう。しかし、事実の一つの〈学問体系〉として「パラダイム」を大きく変える力を持ってしまった。確かにヴィトゲンシュタインも認めているように、そこには積極面は存在している〔かれの作り出す結びつきが途方もなく人々の関心を魅く。それらには魅力がある。偏見を打破することに魅力がある。〔p.175〕〕。だが、彼はそれ以上に「フロイトの精神分析」が有害であることを繰り返して強調する。それは、フロイトの精神分析は「科学的」理論の体裁を採ってはいるが、実際は(iii)〈理論的妥当性〉の要件を何ら満たしてはいることであり、それにもかかわらず、その言葉がもつ「特異な魅力」ゆえに「容認されてしまう」ことである。

「フロイトは絶えず科学的であることを標ぼうする。しかし、かれの与えるのは思弁——仮説の形成にさえ先立つ何か——なのである。」〔p.213〕

「28. フロイトは言う。『心の中にいくつかの審級（法律を参照せよ）がある』と。こうした説明（すなわち精神分析の）の多くは、物理学における説明のように経験によって支持されているのではない。それらの表明する態度が重要なのだ。それらわれわれにとって特異な魅力をもつ映像を提供する。」〔p.178〕

確認できる事実から言えば、〈治療技法〉としての精神分析は当時の「経験科学」の枠には納まらないもの、例えば「呪術」や「シャーマニズム」「民間療法」の流れに通じるものから養分を吸収している。そのことはフロイト自身もある程度自覚しているし、そうした臨床的事実の中に含まれている要因を対自化する作業も行っている。しかし、精神分析を「科学的理論」として構築し

ようという強い志向性を抱いていたフロイトは、臨床的事実に基盤を置きながらも、その一方で〈アナロジー〉にかなり依存した思考で自らの精神分析を基礎付けようとした。フロイトの著作には確かに“実験の論理”と言えるものが貫かれていると同時に、「経験科学」には納まり切らない部分が多く含まれていることも看過されてはならない。⁽⁸⁾

そうした意味でヴィトゲンシュタインの批判は、精神分析の「理論」をそのまま「経験科学的理論」と同一視してしまう精神分析内外の傾向に明確なアンチ・テーゼを提出している。だが、ヴィトゲンシュタインの批判がそれだけのことを言っているのならば、それは従来から「経験科学」が指摘してきたことと大差はないし、〈理論〉としての精神分析の不充分さを指摘したことに止まる。〈治療技法〉としての精神分析の問題は、依然ブラック・ボックスに入ったままである。しかし、彼の批判は更に精神分析の〈治療技法〉の内部に及んでいく。

3. 精神分析における〈変容〉の問題——分析療法の〈言語—実践〉力動——

言うまでもなく〈治療技法〉としての精神分析の機軸をなすのは、分析場面の中で「基本原則」の遵守の下に被分析者が行う「自由連想」である。そして、その〈自由連想法〉は“神経症”の治療だけでなく、“夢”の解釈や“錯誤行為”の解釈にもほぼ同様に適用される文字通り精神分析の要をなす〈技法〉である。その〈自由連想法〉と分析者が行う〈解釈〉に対してヴィトゲンシュタインは次のように論じている。

「25. ここには極めて興味深い心理現象がある。すなわち、この醜い説明が自分は本当にそうした考えをもっていたのだと諸君に言わせてしまうのに、諸君はいかなる日常的なしみでも本当はそうした考えをもっていなかった、ということ。

(1) 夢のある部分とある対象を結びつける手つづき〔自由な思いつき〈feier Einfall〉—R〕が存在する。

(2) 〈だからこれがわたしの意味していたことなのだ〉という手つづきが存在する。迷路があって、人々はそのところで迷ってしまう。〕〔pp.176-177〕

(1)はもちろん〈自由連想法〉の問題であり、(2)はその中で力動的な意味を持ち、分析療法のもう一つの要となる〈解釈〉の投与と〈抵抗〉の処理の問題で

ある。フロイトによれば、〈抵抗〉は〈自由連想〉の中で次のような形で出現すると考えられている。

「……あまりにもとるにたりない、あまりにもばかげている、ここには関係ない、ひとに話すにはあまりにも不快だ、……。」〔Freud, 1969(1916-17), S. 130, 邦訳(上), p.144〕

更に付け加えれば、「何も連想が浮かばない」等の形式も含まれよう。こうした分析治療に出現する〈抵抗〉に対してフロイトは次のような態度で臨むのである。

「抑えつけなければならないと思う思いつきこそ、例外なく最も重要で、無意識的なものを発見する上で決定的な意味をもつものであることが明らかになるのです。」〔Ebenda, 同書, p.145〕

確かに、フロイトのこの論法には一種の“呪縛的”性格が含まれている。常識の論理から言えば、“考えていることは考えているのであり、考えていないことは考えていない”ことでしかないが、フロイトの論法は“考えていないように見えるのは実は考えないようにさせている何ものが働いているからであり、それゆえ一層強く考えている”というものである。日常的な論理および経験科学の論理から言えば、それは「同一律」の否定であり“パラドクス”である。ヴァイトゲンシュタインはここを捉えて、こう批判する。

「フロイトはその分析の中で、多くの人々が受け入れたいような説明を述べている。かれは人々がそれを受け入れたがらないことを強調する。だが、もしその説明が人々の受け入れたがらないようなものだとなれば、それが人々の受け入れたいものでもあることは大いにありそうなことなのである。」〔pp.210-211〕

分析者だけが“真理”を手にしていて、被分析者を「説得」している。そして、分析者は〈抵抗〉という概念を持ち出して、被分析者の反論を封じ込めている。こうした批判はフロイトも承知していた。

「すなわち、もし患者がわれわれの言うことに同意すれば、それはまさにわれわれの解釈が正しいということであり、もし又患者がわれわれに反対すれば、それはただ単に抵抗の一つの徴しにすぎない、つまりわれわれは、やはり正しいのである、というのである。」〔Freud, 1975(1937), S.395, 邦訳, p.217〕

被分析者の当初の「受け容れなかった」状態を、結果として「受け容れる」状態にする事態は確かに「説得—納得」という影響関係であるように見える。しかし、実際の分析過程の大部分は被分析者が語る〈自由連想〉に費やされるのであって、ヴィトゲンシュタインの言うように分析者が終始積極的に〈解釈〉を投与して、精神分析の〈理論〉を「説得」しているわけではない。分析治療が求めるものとは、〈抑圧〉のために欠落している被分析者の記憶を〈自由連想〉とそこに現れる様々の〈抵抗〉の処理によって蘇らせ、バラバラの表象を新たな〈枠組〉へと統合していくこと、すなわち〈再構成〉していくことである。分析過程の主体は被分析者の方にあるのである。もちろんその場合、「蘇る記憶」が単純に被分析者の中から出てきたとは言えないであろう。ヴィトゲンシュタインの次の指摘も決して無視してよい訳ではない。

「無意識という概念についても同様である。フロイトは記憶の中の証拠が分析によって暴露されるのを見つけるのだと自称する。しかし、ある段階では、どのくらいそのような記憶が分析医に由来するものなのか、はっきりしなくなってしまう。」[p.211]

その点から言えば、精神分析が被分析者の〈自由連想〉に重点を置き、その際分析者はその連想群から被分析者の〈再構成〉の援助者の位置に甘んじるべきことが強調されているからと言って、分析療法の「空間」が力動的であること、分析者が被分析者に影響を与えていることは否定できない。ただし、そのことはi)の〈治療技法的妥当性〉の基準から見れば、必ずしも問題になるわけではない。ここでもヴィトゲンシュタインの批判はii)〈治療技法的妥当性〉のレベルでは問題にはならない「説得—納得」という影響関係をレベルの違う「仮説—発見」過程の問題すなわちiii)〈理論的妥当性〉の問題として総括あるいは収奪してしまう「フロイトの精神分析」の論法に向けられている。ここに含意されている問題は、「フロイトの精神分析」の重点を〈技法〉に置くか〈理論〉に置くか、によってその相貌はかなり違ったものに見えてくるということである。全体的に見れば、ヴィトゲンシュタインの批判は「フロイトの精神分析」を〈理論〉として扱う立場から発していると言っていいだろう。その立場は、彼が〈分析治療〉の内部に入りこんで行っても基本的には変わらない。例えば、精神分析の〈説明〉が被分析者に受け入れられてしまう「魅力」の根源にあるのは、《神話》の持つ「魅力」と同じものである、と彼は総括している。

「かれは古代神話について科学的な説明をしたのではない。かれのしたことは新しい神話を提議することだったのである。たとえば、あらゆる不安が誕生衝撃の不安の繰り返しである、という見解の魅力は、まさしく神話の魅力である。『それは昔むかし起こったあることの結果である。』ほとんどトーマ像に言及していることに等しい。」[p.223]

この指摘が当たっていないわけではない。だが、彼が《神話》と規定するところで批判を止めてしまったことは不徹底であると言わざるを得ない。なぜなら、それは精神分析的言説が所謂「経験科学的理論」ではないことを指摘しただけであるからである。問題は「提起」されたが、「解決」されていない。つまり〈理論〉としての精神分析（すなわち精神分析的〈説明〉）の《神話》的効果（受け手が「なるほど、その通り」と納得すること）を以て、〈治療技法〉としての《神話》的効果（被分析者のヒステリーや神経症を治癒させること）の説明に換えることはできないし、また精神分析の言説の性格を《神話》的言説に還元しても、「神経症の治癒という〈効果〉を生み出す《神話》性とは如何なるものであり、そして何故〈効果〉を持つのか」という問題は依然として未解決のままである。⁽⁹⁾

繰り返して言えば、ヴィトゲンシュタインの批判の基調は、「フロイトの精神分析」という〈言語—実践〉体系がそれに接する者をその中に巻き込んでしまう《魔術的》性格の暴露にある。「そう、その通り」と言わせ、批判的検討を封じてしまう《専制的》言説への嫌悪に根差した批判である。もちろん彼は「説得—納得」という影響関係を否定しているのではない。「41. (われわれのしていることの多くが思考のスタイルを変える問題なのだ。)」[p.184] 問題は、むしろそのことに無自覚であることであり、その次元を別の次元へとすり替えてしまうことであり、その提示された思考のスタイルがそれ以外の思考のスタイルを封じてしまうことである。いずれにせよ、ヴィトゲンシュタインのそうした批判を経由した地点からは、「フロイトの精神分析」という〈言語—実践〉体系の問題を「科学性」における「真か偽か」の素朴な問題の次元でのみ論じることとはもはや不可能であることになろう。つまり、精神分析の言説を、言説の「場」から切り離れた「对象的」次元ではなく、二人の主体を含んだ〈言語—実践〉の場の力動の中で論じなくてはならない、ということである。

4. 結びに代えて——精神分析の〈文法〉——

こうして見てくると、ヴィトゲンシュタインの批判は「フロイトの精神分析」を専ら「経験科学」の立場から制限しようとしているように見える。事実、そのように読み取るのが妥当であると思われる箇所は数多く残されている。しかし、「経験科学」の基準によって〈理論〉としての精神分析の不充分さを断罪しているように見える彼の主張の真意は、ある「言語ゲーム」と別の「言語ゲーム」を混同してはならないという警句と理解すべきである。

「しかし、同じ状況の下で精神分析医の説明もまた正しいことがありうる。

そこには二つの動機——意識されているのと意識下のと——が存在する。この二つの動機によって行われるゲームは全く異なっている。二つの説明はあるみで矛盾しうるけれども、それでも双方とも正しいものでありうる。(愛すると憎む。)」(p.173)

それゆえ、彼の「フロイトの精神分析」批判の意味を生かす道は、決して精神分析的〈技法〉によって生み出される精神分析的〈経験〉の“リアリティー”を否定することではあり得ないだろう。精神分析の〈言語—実践〉体系がそれ以外の体系と不連続であること(ヴィトゲンシュタイン流に言えば、全く異なる「言語ゲーム」であること)を自覚しながら、精神分析的〈経験〉を成立させている〈装置〉(すなわち〈規則〉・〈技法〉の総体)を解明し、その中で生じている精神分析的〈経験〉の実態を解明的に記述することこそがその必要なのである。そして、その作業は、ヴィトゲンシュタインの言う〈文法〉の問題、すなわち彼が“語の意味は〈文法〉上の規則によって「定義」され、「構成」され、「決定」され、あるいは「固定」される。” “語の意味は、ある〈文法〉⁽¹⁰⁾体系内で占めるその〈場〉である。” 等という表現で提起した問題を精神分析に應用することであるとも言えるだろう。

〔註〕

(*)

本文中のヴィトゲンシュタインの引用は、全て『ヴィトゲンシュタイン全集10』(大修館書店)からのもの。本文中ではそのページ数だけを記しておく。

(1) 精神療法家A.ストーは、この点に関して述べている。

「もともと精神分析や分析心理学のような思考の巨大な構築物は、ともすれば一つの閉ざされた観念体系に陥りがちである。けれども、ひとたびその体系にはまりこむや、実際にあらゆる観察が一つの確固たる根本仮説の存在を指し示

しているにもかかわらず、その根本仮説そのものはいささかの疑問もさしはさまれることなく終わってしまう、ということにもなりかねない。しかも、かかる構築物そのものがはなはだ複雑なものとなりうるのだとすれば、その依って立つ基本的な根本仮説を掘り起こすことは、当然のことながら、きわめて困難な作業とならざるをえない。〔1982, p.10〕

- (2) 本稿は、ヴィトゲンシュタイン研究を主たる目的としてはいないので、「フロイトとヴィトゲンシュタイン」というテーマがどのような研究状況になっているのかに関して詳細には調べていないが、殆ど研究らしい研究はないようである〔山本信・黒崎宏編, 1987〕。それに触れている文献は幾つかあるが、ヴィトゲンシュタインの言説の繰り返しの域を出ていない。〔春日佑芳, 1985, Malcolm, N., 1974等〕
- (3) この概念は多用されている割には、明確な定義はないのが事実である。ここでは一応、ヴィトゲンシュタインの次のような定義に従って、この用語を使用している。「わたくしはまた、言語と言語の織り込まれた諸活動との総体をも言語ゲームと呼ぶ。」〔1976, p.21〕『『言語ゲーム』』ということばは、ここでは言語を話すということが、一つの活動ないし生活様式の一部であることを、はっきりさせるのでなければならない。〔同書, p.32〕
- (4) 次の言明を参照。
「全体としてみればフロイトの病気を治したいという願望はあらゆる治療者同様、真面目なものであったと思われるが、別の動機も彼を駆り立てたようである。フロイトにとって患者を治すことは、自分のたてた病因の仮説と技術的改革の正しさを立証することを意味していた。」〔Chertok, L. & de Saussure, R., 1987, p.98〕
- (5) 『夢判断』の扉に引用されたウェルギリウスの銘「天上の神々を動かさざりせば冥界を動かさむ」に託した意味の一つは、こう理解できる。また、フロイトの次の言明も参照。
「しかし精神分析学では世間一般の人たちの物の考え方との関連をつねに失いたくないと願っておりまして、普通の人が使う概念を排斥するのではなくて、むしろ好んで学問的な用語として採用することになっているのです。」〔1975(1926), S.287, 邦訳, p.170〕
- (6) フロイトの精神分析を「メスメリズム」や「クリスチャン・サイエンス」などの流れに位置付けて論じることは、しばしばなされている。古いものでは〔Zweig, S., 1931〕から始まって、新しくは〔Ellenberger, H., 1970〕〔Chertok, L. & de Saussure, R., 1987(1973)〕等。
- (7) フロイトは対話者を想定しながら、精神分析と「魔術」との関係について、こう述べている。「しかし、それでもやはりことばは、もともとは一種の魔術的行為であって、大昔の力の多くを今日もお保持しているのです。」〔Ebenda, S.280, 邦訳, p.163〕
- (8) フロイト自身、このことは充分自覚していたと言える。ヴィトゲンシュタイン同様の批判を想定した次の反論参照。
「何を誤解なさっているのですか。これはどんな科学においてもざらに見られ

る補助概念、仮説です。どんな場合にも一等最初の仮説はかなり粗っぽいものだったのです。[……] こういう修辞——『フィクション』と哲学者フェイヒンガーは呼んでいます——の価値は、それをを用いることによってどれだけ実りがあるかということにかかっています。』〔Ebenda, S.286, 邦訳, p.170〕

(9) 筆者は、この問題を人類学や宗教学における「シャーマニズム」研究と比較研究するという方法で別途論じる必要があると考えている。

(10) 『ワイトゲンシュタイン全集10』, p.11。

<引用及び参考文献>

- Chertok, I. & de Saussure, R., 1987, 『精神分析の誕生』, 岩波書店。
- Ellenberger, H., 1970, *The Discovery of The Unconscious*. (邦訳, 『無意識の発見』〔上・下〕, 弘文堂)
- Freud, S., 1969(1916-17), *Vorlesungen zur Einfuehrung in die Psychoanalyse*, Studienausgabe, Bd. I. (邦訳, 『精神分析入門』(上), 新潮文庫)
- , 1975(1926), “Die Frage der Laienanalyse”, In: Studienausgabe, Ergänzungsband. (邦訳, 『フロイト著作集11』に所収)
- , 1975(1937), “Konstruktionen in der Analyse”, In: Ebenda. (邦訳, 『改訂版・フロイト選集15』に所収)
- 春日佑芳, 1985, 『ワイトゲンシュタイン——哲学から宗教へ——』, ペリかん社。
- Laplanche, J. & Pontalis, J.-B., 1973, *The Language of Psycho-Analysis*. (邦訳, 『精神分析用語辞典』, みすず書房)
- Malcom, N., 1974, 『ワイトゲンシュタイン——天才哲学者の思い出——』, 講談社現代新書。
- Storr, A., 1982, 『精神療法と人間関係』, 理想社。
- Wittgenstein, L., 1976, 『ワイトゲンシュタイン全集8』, 大修館書店。
- , 1977, 『ワイトゲンシュタイン全集10』。
- 山本信・黒崎宏編, 1987, 『ワイトゲンシュタイン小事典』, 大修館書店。
- Zweig, S., 1931, *Die Heilung durch den Geist*, Isel-Verlag. (邦訳, 『ツヴェイク全集12』, みすず書房)
- (筆者の住所: 〒183 府中市武蔵台3-15-10 秋津荘 202号室)